

## いのちの教育の充実を願って

甲南学園顧問  
甲南大学非常勤講師  
教職教育センター共同研究・実習室

近藤 靖宏

教育基本法が改正され、昨年3月には小中学校の新しい学習指導要領が告示された。教育基本法には、教育の目標の一つとして「生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと。」が掲げられ、新学習指導要領では生命尊重の心を育てることを一層重視する内容が示された。各学校にあっては、いのちの教育の充実に向けた取り組みの必要性がより大きくなったと言えよう。

いのちの教育の現状を概観すると、その大切さや必要性は高まりを見せているが、教育現場への定着については、点はあるが線として、ましてや面としての広がり・深まりは、今後の努力にかかっている。

私の県教育委員会在任時には、震災をはじめ子どもの命をめぐる悲しい出来事に遭遇し、「いのち」や「こころ」の教育の大切さを痛感した。教育委員会がこうした出来事の後に開く検討委員会等からの報告にも、決まってこの教育の重要性が指摘され、具体的な提案を受けた。そして、取り組んだ施策は、兵庫の教育が直面した「負」の経験からの所産であり、斬新で意義ある実践であったが、初期の目的達成には紆余曲折があったように思う。

私の乏しい経験からではあるが、そのいくつかの例を通して、いのちの教育の方向性を探ってみたい。

### いのちの教育の取り組み例

#### ① 新たな防災教育

阪神・淡路大震災は、多くの尊い命を奪い、被災者は生活基盤を失った。一方、私たちはこの過酷な現実から多くの教訓を学んだ。

兵庫教育の創造的復興を目指した防災教育検討委員会からの報告の一つに新たな防災教育の推進がある。子どもたちに命の大切さを教えることを原点に据え、人間としての在り方・生き方を考えさせる教育である。この教育の充実と普及を図るため、各教育事務所に専門推進員を配置し、幼稚園から高等学校まで発達段階に応じた副読本『明日に生きる』を作成し、実践事例集も作って各学校に配付した。

しかし、成果を期待する前に、いじめを苦にした女子高校生の自殺や男子高校生が友人を惨殺する事件が続き、平成9年には全国を震撼せしめた中学生による児童連続傷害事件が起こり、空しい想いが募った。

## ② 生と死を考える教育

これらの事件の後、県教育委員会は「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」、「心の教育緊急会議」を持ち、提言を受けた。その一つに「生と死を考える教育の推進」がある。平成10年度から教育研修所において、教職員に生と死を考える教育を推進するための実践的指導力を培う研修が開始された。こうした研究・研修を続けて、平成18年度には「命の大切さを実感させる教育プログラム」をまとめ、その実践事例集も作られた。

県を退職後、「兵庫・生と死を考える会」の教育部会で小・中・高の先生方と論議を重ね、生と死の教育のカリキュラムやビデオを作り、教育現場での実践報告会を持つなど、この教育への関心を喚起してきた。

ここでの悩みも、“どうしたらこの教育を広められるのだろうか”、であった。

いのちの教育の普及のために

### ① いのちの教育とは

「いのち」を“命”や“生命”という漢語ではなく、和語のひらがなで表記したのは、身体的側面だけではなく、私たちの祖先が太古の時代から脈々と受け継いできた精神的・社会的な側面も含む人間のあらゆる営みと捉えたからである。もっとも、いのちの教育にとって、身体的な生と死の視点からのアプローチは重要であり、とりわけ、タブー視されがちな死についてもっと重視すべきであろう。

近藤卓らの調査(\*1)によれば「いのち」には次の20項目が含まれるとしている。— 誕生、出産、死、病気、障害、葬式、老化、生き方、がん、生、結婚、性、自殺・自死、親からもらったもの、限りあるもの、人と人のかかわり、大事なもの、愛、生きる、事件・事故 —

このように、いのちの教育はあらゆる教育活動の中で現に実施されているものであり、道徳、教科、特別活動、総合的な学習の時間に散らばって存在している。大事なことは、これを扱う際に教授者がいのちの教育としての意義を伝えられているかどうかである。

日野原重明さんは小学3年生へのいのちの授業で、「いのちとは」と問いかけ、「みんながもっている生涯の時間のことだよ」と導かれ、「その使い方が大事だよ」と説かれていた。

### ② いのちの教育の目的

いのちの教育の目的は、自分のいのちを大切にすることを育てることにある。自分はこの世でただ一人のかけがえのない存在であることを自認できるようにすることである。ありのままの自分を受け入れ、自分が自分であっていいと思えることは、自他のいのちの大切さを実感するうえでの前提であり、核心の一つである。

また、いのちには限りがあるが祖先から子孫につながっていること、自然界も含めて多くの人たちに支えられ自分が存在していることを感得することにある。そして、生きていることのすばらしさを実感し、感謝の気持ちを育むことである。

生と死の教育研究会で小・中学生に死生観を問うアンケート調査(\*2)を実施したが、自己肯定感(自分自身が好きだ)の乏しい子どもは「本当に人のいのちは大切だと心の底から感じたこと

がありますか？」の問いに否定的な回答が極めて高いことが分かった。そして、自己肯定感のない子どもは、全体で18%、年齢とともにその割合は高くなり、中学2年の女子は70%を超えるなどの実態が明らかになった。

自己肯定感は自分のいのちはもとより他をも大切にすることの育ちと関係が深いのである。私たち大人は、子どもたちに自己肯定感が乏しい現実を憂慮するだけでなく、その育成を喫緊の課題として受け止め、教育実践に結実したいものである。

### ③ いのちの教育の方法

いのちの大切さについては、言葉のうえでの理解に終わるのではなく、子どもたち一人一人が心から実感できるようにしたい。実感は体験から得られるものであるが、体験さえすれば実感できるものではない。心から実感する体験とは、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうといった経験そのままの感覚、いわば言葉になる以前の身体を通しての五感が出発点である。

河合隼雄さんは「心の成長と体験」と題した講演の中で、「…自分のやりたいと思っていることとやろうと思っていることが結びついた時に、それはその人の体験になるのです。頭ごなしに言われてやっていることは体験にはなっていないのです。本当の体験こそが子どもの心の成長に役立っているのです。…」と、納得の上での体験が大事だと説かれていた。

子どもが体験することの意義を理解し、意欲的に取り組めた体験が真の体験となる。そのためには、体験を通してどのような気づきを得られたのか、どのようなものの見方・考え方を身につけたのか、そしてそれらをもとにどのような行動がとれるのかを問うべきである。

学校では子どもの発達段階に応じた自然体験や社会体験など様々な体験活動が行われている。最近、環境教育が重視され、その体験活動も多く取り入れられるようになった。これらの体験活動をいのちの教育の視点から点検し、その充実に努めてほしい。

いのちの教育の充実に向け考慮したい二点を付記する。

- ・いのちの教育の原点は家庭にある。家庭と連携し、地域の教育力を活用した取り組みが効果をあげる。また、医療など「いのち」の現場で働く方や「いのち」について大きな喜びや悲しみを経験された方などをゲストティーチャーに招く授業も一考に値する。
- ・この教育の成否のいかんは教員の指導力にある。教員は自らの死生観を磨き、指導方法を工夫し、常に研鑽する真摯な姿勢が求められる。また、教員の養成・研修機関においてこの教育のカリキュラムがより充実されることが望まれる。

私は、子どもたちに直接指導する立場ではないが、学習指導要領の本格実施を控えて、各学校の教育課程に、いのちの教育が地域や子どもの実態に応じて適切に位置づけられ、その実践に結実することを願っている。

(\*1) 近藤卓編著『いのちの教育の理論と実践』(金子書房2007) 19ページ

(\*2) 2004年兵庫県内の小・中学生3719名に質問紙法で実施。